The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈書評〉星野英紀・弓山達也編著『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』
Author(s)	王, 文潔
Citation	宗教と社会貢献. 2019, 9(2), p. 53-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

星野英紀・弓山達也編著
『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』
ハーベスト社、2019 年 2 月、A5 判、384 頁、7,200 円（税別）

王文潔*

1. はじめに

東日本大震災から 8 年半の月日が流れたが、いまだにコミュニティの喪失状況を払拭できていない。そうした中で宗教者は、避難先での被災者の新たなつながりをつくることに奔走し、避難者の帰還できない故郷の文化を伝承するなど、コミュニティ再建の一端を担っている。本書はそうした被災地における宗教の役割を印象付ける重厚な共同研究の成果である。

本書の冒頭部分で、「コミュニティという公共空間において宗教はプライベートなものに位置づけられている」ことが多いため、災害後のコミュニティ再建を宗教的視点からアプローチする研究の不足が編者によって指摘されている。それに対して宗教学、宗教社会学、社会学を専門とする 13 名の執筆者が、東日本大震災（に伴う原発事故）の被災地である福島太平洋岸浜通り（いわき市と相双地域）を調査地とし、震災直後からまちづくりが中心となる復興期までの長期的な調査期間を設定した上で、多様な研究方法を用いて被災地における宗教の公共性・社会貢献を検証した。タイトルにある 2 つのキーワード、「宗教」と「コミュニティ」に対して真摯に取り組み、コミュニティの歴史、地域構造、伝統芸能などに関する深い論考に加え、個人・組織レベルでの宗教者の活動、宗派を超えた宗教者ネットワークの活動の記録など、多様性を示したことが本書の大きな特徴である。

次章では本書の構成と内容を紹介する。

2. 本書の内容

周到に計画された共同研究や丹念な調査に基づき、包括的な調査結果に加え、臨場感のある被災後の宗教者や被災者日誌の分析など多岐にわたる内容によって本書は構成されている。第 1 部は調査地の地域構造、宗教の歴

* 大阪大学大学院博士後期課程・bunketsuou@gmail.com

史及び東日本大震災による被害状況の紹介、第 2 部はいわき市における宗教者の支援活動、第 3 部はいわき市の震災モニュメントに関する調査結果、伝統芸能や復興イベントの宗教性など宗教文化の論考、第 4 部は相双地域の住民避難体験の記録、寺院の災害前後の日常活動の変化を考察したものである。4 部、18 章に及ぶ本書の構成を示しておく。

第 1 部　調査地の概要と震災被害（第 1 章、浜通りにおけるいわき市の位置づけと震災被害；第 2 章、相双地域における原発事故と寺院）

第 2 部　いわき市における震災後の宗教教団と宗教者（第 3 章、一僧侶の支援活動と宗教者意識；第 4 章、浄土宗青年僧侶による復興支援とそれを支える力；第 5 章、信仰と災害・復興支援活動；第 6 章、神職たちの支援活動；第 7 章、福音系キリスト教会の支援活動；第 8 章、新宗教教団の支援活動 1―第 9 章、天理教・いわき市の事例から；第 10 章、新宗教団の支援活動 2―創価学会・福島常磐総県の事例から）

第 3 部　震災モニュメントと宗教文化（第 11 章、震災モニュメントの現在と今後；第 12 章、いわき市における震災モニュメント等調査報告；第 13 章、福島県浜通り沿岸地域の復興と神社；第 14 章、民俗芸能と新しい祭り）

第 4 部　住民避難の町から（第 15 章、原発難民と「ふるさと」と寺院―福島浜通りの寺院檀信徒調査より；第 16 章、原発被災寺院と原発難民；高台復興住宅建設と行政・住民・菩提寺；第 17 章、震災からの復興と宗教文化の行方；第 18 章、「忘れられた町」の「四日間」とその後）

本書を読み解く際の一つの課題は、調査地の地域特性と被害状況の把握である。本書の調査地であり、浜通りと呼ばれる福島太平洋岸一帯は、北部の相双地域と南部のいわき地区に分けられる。それぞれ地震、津波、原発事故の複合災害の被災地であり、異なる被災状況が重層的に進行している地域である。また、いわき市と相双地域は地域構造が異なることが、本書第 1 部で紹介されている。いわき市は多核都市の特徴を活かし観光都市を目指して発展を遂げたのに対して、出稼ぎ労働者がほとんどであった相双地域では、地域経済が原発の誘致によって大きく発展し、地域の雇用も原発に大きく依存していたと言わざるを得ない。両地域には構造の違いがあるため、震災被害と住民避難においてそれぞれ異なる状況を抱えている。震災後、いわき市は 2 万人以上の避難者を受け入れたことで最大の受け入れ地域となった。そのため「暗黙のうちに震災によって失ったものと得た者が被災者の

間で比較され、被害とはなにか、被災者とは誰かということが問われるような感覚がある」（p.19）と述べられているように、被災者間で生まれた様々な葛藤や不満がいわき市に集中していると言える。一方で原発事故発生後、多数の住民が避難した相双地域は、いわき市と異なる深刻な状況を抱えている（第 2 章、第 4 部）。原発に依存していた生業の雇用が継続できなくなり、さらに原発被害の特殊性により元の移住地への帰還が困難であるため、災害前のコミュニティの衰弱、崩壊が余儀なくされる。そのため「お堂もない。墓もない、法話を聞く檀信徒もちりぢりばらばら」（p.30）の状況で寺院の再建や日常活動も岐路に立たされていると言わざるをえない。

第 1 部では被災地であると同時に多くの受け入れ避難者の支援地であるいわき市と、住民の帰還が難しい相双地域が異なる復興の課題に直面していると論じられている。上記のような地域特性、それぞれの復興課題を念頭に置くことで、本書のテーマであるコミュニティ再建における宗教の役割をより理解できるだろう。

第 2 部ではいわき市における宗教教団と宗教者の支援活動の事例が取り上げられている。研究対象は高野山真言宗獨鈷山冷泉寺、浄土宗福島教区浜通り組青年会などの伝統仏教教団や大國魂神社に加え、グローバルミッションジャパン、孝道教団、天理教、創価学会などの新宗教教団があげられている。この部分では宗教者のコミュニティ支援の役割について幅広く検討が行われており、その中でも以下の数点を紹介する。まず宗教者として継続的に支援活動に従事する要因が解明されている。宗教者や宗教教団がもつ様々な資源が支援活動の土台であると、ほとんどの研究者によって指摘されている。例えば冷泉寺の副住職の支援活動を追う事例研究では、寺院が地域に根差しているからこそ震災後も住民が相談しに来やすく、副住職は様々な思いや葛藤に分断された被災者に寄り添うことができたと論じられている。この点について、宗教施設（教団）を「物心両面でのよりどころ」と呼ぶ被災者がいることも報告されている（第 5 章）。また宗教者の長期的な支援には教団の組織的な支えが求められている。例えば第 4 章では浜通り浄土宗青年会の支援活動を対象に、地域寺院の自主支援活動に中小規模関連団体の協力が加わり、さらに復興期には教団の組織的な支援体制が整えられるという支援のダイナミズムが丁寧に描き出されている。第 8 章では教団活動に「吸収しきれない」支援の想いを形にする新規ネットワークの

事例が取り上げられ、組織されない有志の活動としての利点と課題が示されている。

また宗教者の支援活動を行う上で、避けては通れない支援活動と信仰との関係について多くの執筆者によって言及されている。伝統宗教に比べ新宗教教団の支援活動は、非信者である被災者が警戒心を持ちやすいという点が複数の執筆者によって指摘されている。それに対して、非信者との関係構築のために新宗教教団が行った様々な工夫も紹介されている。震災直後の救援活動からコミュニティづくり活動まで息の長い支援活動を継続することによって、住民の信頼を得られたと報告されている。また大半の宗教者は宗教色を一切出さずに活動を始め、「嫌がる人が後から不快な思いをしないように、支援活動を受け入れるかどうか」（p.158）について事前に了承を得るなど、宗教者によって様々な配慮が行われていることがわかる。宗教の教えが活動の動機であり、普段の活動の延長線上に支援活動が位置付けられるという調査対象者の思いが示されている一方で、宗教者が行った支援活動を「ケア」ではなく、自分の人生を他者と共有する「シェア」として捉える興味深い視点についても指摘されている（第 7 章）。また非信者である市民と接する機会が増えることで、布教をしなくても会員数が増加するという事例も報告されている（第 7 章）。さらに災害時における信者コミュニティの機能に注目した研究も本書で紹介されている（第 9 章）。震災後、創価学会は離散した信者を避難先の地方組織と結び付け、信者に新たな居場所を与え、仲間集団に触れる機会を提供していた。時期によって信者の間でつらい体験を分かち合えない場面もあるが、「被災者へ積極的に生きる意味を提供し続け…（中略）…特殊な体験の共有によって同悲同苦の共同体」（p.189）として機能していると、災害時の信者ネットワークが評価されている。

加えて上記の事例が取り上げられる際に多様な分析枠組みが用いられている。応急対応期、復旧復興期などの復興時間軸をベースに被災地での支援活動を追う事例研究（第 4 章）や、支援活動の連続性を捉えるために、活動内容から分類する DMC モデルを用いた研究（第 6 章）に加え、不安定な状況が長期化する被災地、被災者を一律に特定の局面、フェーズに区分することに対して慎重であるべきと主張する研究（第 9 章）もある。第 2 部での研究は宗教社会学だけでなく、組織学や災害社会学に関しても有意義な検討

や事例提供がなされている。

第 3 部はいわき市内の震災モニュメントの調査結果や、民俗芸能と祭りなどの宗教文化の考察によって構成されている。東日本大震災後、いわき市内の慰霊碑、記念碑、彫刻などの設置をめぐってコミュニティ内外の宗教者が地域ネットワークを活用し、東奔西走していたことが記録されている（第 10、第 11 章）。その背後には研究チームがいわき市内の 200 を超える仏教寺院に情報提供を求め、何度も実地訪問調査や、関係者への聞き取り調査を行った経緯がある。また黒崎浩行が浜通り沿岸地域の神社の動きを調査した上、祭りの復活や神事芸能の継続は避難者にとって心のよりどころという意味をもち、帰還時のコミュニティ再建に重要であると指摘している（第 12 章）。弓山達也の研究では宗教的な性格を帯びる復興イベントが注目されている。弓山は復興イベントと祭りの特徴的な違いは聖性（宗教性）と共同性であると指摘した上で、複数の復興イベントの聖性（大漁旗などの表象シンボルを分析する）、共同性（パフォーマンスと担い手を分析する）を考察した。シンボル、担い手、パフォーマンスに宗教的資源を有機的に組み合わせることによって、聖性と共同性を生み出すという分析結果が出た（第 13 章）。同じく祭礼に関する研究として「千度大祓」という新たな祭礼が支援活動の活発化によって触発された事例は第 2 部で列記されている（第 6 章）。祭りに集まることによって震災以前の地縁を確認できる一方で、一時的な集まりに過ぎずコミュニティの再建が困難であるという声もある。地域コミュニティと神社の関係性が「崇敬者と神社」に変化することが懸念される。

第 4 部では、執筆者である星野英紀が「ふるさと」、「寺縁」といったキーワードのもとで、帰還が困難である状況の中で浮彫りになった寺壇関係と伝統仏教寺院の役割を論じている（第 14 章～18 章）。立ち入りの制限があるため住民主体の復興が極めて難しいと指摘され、住民の住宅再建参加の事例として、相馬市原釜・尾浜地区の「東部再起の会」が紹介されている。会の立ち上げに不可欠であった漁師地区特有の濃密な人間関係に加え、「海が見え、潮の香りのする安全な地域に住居を構えたい」という要望書に記載された内容から、「象徴的復興」という考え方の重要性が提起されている。それは新住居の獲得などといった客観的な基準を満たしたとしても獲得できない、復興感というものである。自然、歴史、文化、伝統への共感を新しいコミュニティで高めることが大切であり、その一端を担ったのが宗教者

であると本書で指摘されている。また葬式やお墓問題、寺院の日常活動などの震災前後の変化も詳細に紹介されている。さらに、先祖のお墓を守ってきたことや檀家としての長年の付き合いにより寺の復興と僧侶の役割への期待が高まっていることが本書の調査によって明らかにされた。そのような寺院への信頼や期待は、宗教の教えに基づく信仰心より、宗教文化という「先祖への根強い思い、自然と先祖と菩提寺が解きがたくつながり合っているような」（p.339）ものである。一方で寺院再建の土地確保から墓地の建設までの長い道のりにおいて、住職個人の意欲や資質、後継者の有無、寺の規模が深く影響していることも復興過程における今後の不安要素として指摘されている。本書は「『忘れられた町』の『四日間』とその後」というタイトルの章で締めくくられた。原発事故直後の被災地域では不安や不便が強いられる中、役場職員、消防団、医師、地元の人々が助け合った貴重な記録となった。最終章の内容は日本の伝統的コミュニティの温かさ、地縁ネットワークの強さを私たちに思い知らせると同時に、災害がもたらす理不尽さと残酷さへ再び私たちの目を向けさせた。

3. おわりに

本書はタイトルを「宗教とコミュニティ」としているが、宗教者だけにフォーカスするのではなく、被災コミュニティの中で宗教の存在を位置づけ、宗教者の役割を評価するという印象が見受けられる。「地域や寺院が抱えている問題は多様であり個別であり、一般化するのではなく、実態を把握してからさまざまな判断すべき」（p.30）と編者が指摘しているように、安易に一般化することで調査対象の固有性を見失う危険性をはらんでいる。複雑多重な課題を抱えている原発被災地域の現状認識の共有が、ほとんどの執筆者の間でなされている。原発被災地域や被災地の復興過程に注目した研究が少ないことを考慮すると、本書での研究成果は学術的に貴重な貢献と言えるだろう。その一方でこのことと表裏一体であるが、本書のそれぞれの研究成果は独立性が高く、全体を通読せずに個々の研究の位置づけを十分理解できないこともある。「はじめに」と第 1 部では本書の研究背景、意義が述べられているものの、全体の分析枠組みや結論が明示されていない。調査地であるいわき市と相双地域の復興の課題に対してそれぞれどのような

宗教者の対応が必要なのか。また第 2 部では同じ理論を用いた執筆者間の連携がみられる一方で、第 3 部で取り上げられている「震災モニュメント」と「震災文化」はどのような関連性があるのか判然としない。当然これらの問いはコミュニティと宗教の関係性、コミュニティ再建における宗教者の役割が根底にある本書ではもはや自明のものであり、本書の成果に比べれば些末なものである。また本書の成果の背後には、調査地の地理的条件や被災原因の特殊性によりアプローチが困難な中でも、継続的かつ精力的に現場に足を運んだ執筆者をはじめとする研究者の姿があることは言うまでもない。福島相双地域に関しては調査の実施が困難であることも考えられるが、編者が指摘しているように伝統仏教教団以外の宗教者の活動に関する包括的な調査が必要とされている。このように本書の中には震災から一年後に執筆された論文や中間報告なども多数見られるため、今後の研究のさらなる発展を願いたい。最後に、評者の勉強不足により本書の数々の魅力を伝え損ねたこともあるが、本書は宗教社会学や震災復興研究に幅広く関心を持つ読者にとって、被災地の今後を考える上で必読書であることを改めて強調したい。